

吉原・或る女の物語

とんだ玉三郎

私は長野のとある村で比較的大きな養蚕農家の長女として生まれ、何一つ不自由なく育てられた。私が長野市内の女学校に入った頃、父は出入りしていた蚕の買い付け業者の薦めで株を始めた。それは、ちょうど欧州の戦争が始まった年のことである。その頃は景気がよくて株も高騰しており、父もかなり儲けたようだった。その金で桑畑を買い足して、蚕を飼うための納屋も増築し、人を新たに雇って事業を拡げていった。しかし、順風満帆に見えた生活はわずか数年しか続かなかった。

欧州の戦争が終わるととたん不景気になり、生糸の輸出も激減し、製糸工場に卸す繭の価格も大きく下落した。下落で損をした分を株で取り戻そうとした父であったが、その株も不景気で暴落して大損をした。あせった父は桑畑も養蚕場も家も抵当に入れて金を借りて株を続けた。暴落の一途でその金もあつという間に底をつき、さらに借金を重ねて泥沼にはまり追い込まれた父は死を選んだのだった。

1

父の自殺のあと、知らない男の人たちが度々家にやってくるようになった。母との会話を小耳にはさむと、それは父の遺した借金返済の催促だった。

ある日のこと、玄関先で母が遠い親戚にあたる山本さんと知らないもう一人の男の人と、ここそこと何か話しているのを目にした。

二人の男が帰った後に、母に呼ばれた。

何かかと思いつながら、私は言った。

「また、借金のはなしなのね」

「そう。山本さんはこんなことになったのだから、自分の貸した分は返済してもらうことは諦めると言ってくれているのだけれども、山本さんのところに『代わりに払え』と金貸しが連日のように押しかけてきているらしいの」

「山本さんだって、そんなにお金はないでしょう」

「そうよね。それに自分の分は諦めると言ってくれているのだし、第一、これ以上の迷惑はかけられないよ」

「でも畑も売ったし、もうお金なんか、どこにもないんじゃない。それにこの

家もやがて他人のものになるんではしょ」

「そう、もうすぐ、ここを出て安西の叔母のところへ世話になることにしているって、前に言ったわよね」

「生まれ育った家とも、いよいよ、お別れね。お婆さんの家にお世話になって、畑仕事を手伝ってなんとか食べていくにしても借金はどうするの。私が外で働いたくらいではどうすることもできないくらいの額なんではしょ」

「山本さんと一緒に来た男の人、寺島さんっていうんだけど、その人が言うには、お前に協力してもらえば、なんとかなるって言うの」

「どう、いうこと？」

「お前が東京に奉公に出てくれれば、金を貸すって言うてくれるの」

「その奉公っていうのは、御屋敷の女中さんかなにかになるっていうこと？」

「いや、普通の家の女中さんではないって。なんでもお店に二年か三年、奉公に出てくれれば、お金を貸してあげる。それはすぐに返す必要のない金で、そこで働いて毎月、少しずつ返してゆけばいいと言っているの」

「奉公って、どんなことをすればいいの。家にお金がないことはよく分かっているし、妹もまだまだお金があるだろうし、私で務まるなら、行ってもいいよ」

「詳しくは聞いてないの。お前がその気なら寺島さんに来てもらって、もっと話を聞いてみようかしら」

数日して、山本さんに連れられて寺島さんが再びやってきた。

「周旋屋の寺島という者です」

寺島さんは私の顔をじろじろ見ながら言った。

私は母と寺島さんの顔を交互に見ながら訊いた。

「母から聞きましたが、私が奉公に出れば、お金を貸してもらえますか」

「そうです。娘さんさえ、決心してもらえば、すぐにご用立てします」

母は私の顔を見た。私は不安な顔つきでさらに訊いた。

「その奉公先でどんなことをすればいいのでしょうか」

「なあに、簡単なことですよ。お客さんがみえたら、お酒や料理をお出しして、お酒のお酌をして、お話のお相手をすればいいのです。高級な料理屋ですから、それなりにりっぱな人たちが来ます。その方たちのお相手ですから、女学校を出た貴方のような方が望まれているのです。自分の部屋やお客さんの前に出る時に着る着物などもすべてお店が用意してくれます。体ひとつで行けばいいだけです」

随分、簡単なことでお金が借りられるものだ、仕事って、そんなものなのか

しら、と思った。製糸工場で働いていた尋常小学校の同級生があまりの仕事のつらさに耐え兼ねて逃げ出して家まで歩いて帰ってきたという話を聞いたことがあったので拍子抜けした感じだった。寺島さんは、奉公先のことを説明してくれた。

「それに、ご飯だって毎日、東京の一流の料理人の作るご馳走ばかり。もちろん、御給金もちゃんと払ってもらえて、お休みには東京見物も出来ますよ」

私にはいいことづくめに聞こえた。

母が恐る恐る訊いた。

「ところで、お金はいくらぐらい用立ててもらえるのですか」

私の頭のとっぺんから顔、胸、腰とじろじろ見まわしながら寺島は言った。その視線が少し気になった。

「そうですね。娘さんはご器量がいいし、お客さんにも喜んでもらえるでしょうから、千五百円だけでもしょう」

私と母はその額の多さに驚き、お互い顔を見合わせた。女学校の先生の月給が六十円か七十円くらいだと聞いていたからだ。この長野の田舎でそんな大金を見た人さえないのではないかと思った。

母は思わず、訊き返した。

「今、千五百円といましたね。本当にそんなに貸して頂けるのですか」

「そうですね。娘さんさえ『うん』と言ってくれれば、数日のうちに内金としてお父さんの残したという借金分の千円をお持ちしますよ。あとの五百円は娘さんを東京にお送りしてからお渡しします。それをお母さんは自由に使うことが出来るのですよ」

不安になって訊いた。

「それで、そのお金、どうやってお返しするのですか」

「なあに、簡単なことです。東京は田舎と違って給金は高いので、そのなかから返していけば、二年も経てば千五百円くらい、すぐ返せますよ。気が付いたら借金なんてなくなってますよ」

いとも、簡単に言うので、東京というところは凄いなと思った。

山本さんも納得したのか、返事を催促するように促した。

「決して悪い話じゃないと思うよ。これも親孝行だよ」

話がうま過ぎるようにも思ったが、東京という大都会へのあこがれもあり、答えた。

「分かりました。奉公に出ることにします」

「そうですか。それはよかった。亡くなったお父さんも娘さんにきつと感謝すると思いますよ。これでお母さんもご安心でしょう。それでは内金として、三日後に千円を持ってきます。先ほど言ったように残りは娘さんを東京に送り届けてからお渡しします」

寺島さんは私の顔を見ながらニコニコして言った。

言った通り、三日後に寺島さんは来て母に受け取り証文と引き換えに千円を手渡した。

それから期待と不安の入り交じった日々を過ごした。母は妹にも話したのだろう、まだ、尋常小学校に通っている妹が私に言った。

「いいな、お姉ちゃん、東京に行くんだって。私も大きくなったら行きたいな」とすると母が言った。

「イネ、お姉ちゃんは遊びに行くんじゃないのよ。大事なお仕事をしにいくのよ」

「お仕事って、何なの」

一瞬、私は母の顔を見た。「お酒のお酌」とは子供には言い出せないのどつさに誤魔化した。

「難しいお仕事よ。イネも大きくなればわかるようになるわよ」

何にも知らない妹と離れることに哀しさを感じた。

さらに、一週間ほどして寺島さんが来て告げた。

「明後日は日取りがよいので、東京に行くことにしましょう。そのつもりで用意してください。迎えにきます。私も一緒に行きますので安心してください」

翌日、母が門出を祝して赤飯を作ってくれた。母と妹とは当然、会えなくなくと思うと、寂しさがこみあげてきた。しかし、同級生で女工となって、あちこちの製糸工場に行っている人たちのことを思い出して、自分もしっかりしなければと思った。

東京に行く日が来た。母と妹に分かれを告げ、迎えに来た寺島さんと人力車で駅まで行き、一緒に汽車に乗った。汽車の中で寂しそうにしている私を見て寺島さんは言った。

「ちっとも寂しいことなんかないですよ。あつちに行く二度と田舎に帰らないって気になりますよ。何人も娘さんを東京に連れていきましたが、皆、東京で楽しそうに仕事をしながら暮らしていますよ」

しかし、東京がだんだん近くなるにつれて「いったいどんなところで働くのだろうか」と思うと不安がますます大きくなってきた。思索しているうちに、

汽車は上野駅に到着した。寺島さんは駅の前で客待ちをしていた自動車の運転手となにやら話をしていたが、私に乗るように促した。自動車なんか県のお役人が女学校を視察に来た時に乗ってきたのを見たくらいで、自分が乗れるなんて思ってもみなかった。

乗ると運転手がじろじろと私の顔や着物を見た。なにか視線に得も言われぬいやらしさを感じた。

動きだした車の窓から見える景色は別世界だ。道の両側には大きな店が立ち並び、電車が走っている。

やがて車は大きな門の前で止まった。

「着きましたよ」

運転手は車を止め、降りて扉を開けて降りるよう促した。

寺島さんが金を払うと運転手は礼を言い、車は去っていた。門をくぐると、まっすぐに伸びた通りの両側に同じような家が並んでいる。ふたりで「大黒」という看板の架かった店に入った。寺島さんが店先にいる人となにか話した後、寺島さんと私は大きな部屋に通された。待っていると恰幅のいい大島の羽織を着た五十才くらいの男の人が入ってきた。寺島さんは小声で「この店の御主人だ」と私に言った。

「大山タネさんいのですか。女学校を卒業していなさるとの事、なかなか珍しいですな」

店の主人は私の顔を覗くように見ながら言った。

すると、寺島さんが言った。

「残念なことにこの人のお父さんが株に手を出して失敗して大きな借金を残して亡くなったものですから……」

「そうですか、すると田舎にはお母さんおひとりだけですか」

「いや、妹がひとりいます」

と私は答えた。

「じゃ、早く、奉公を終えて帰って親孝行してあげてください」

その後も店の主人は田舎のことや家族のことなどいろいろ訊いた。なにを答えても、始終、ニコニコしていた。

「分からないことは、今、ここに来るおばさんになんでも聞いてください。一生懸命、働いていれば二年、三年とは言わず、もっと早くお母さんや妹さんの所へ帰れますから」

と言って部屋を出ていった。すると入れ替わりにおばさんが入ってきた。

「こんにちは。私の名前は松島、ここに慣れるまで貴方のお世話をすることになっっているの。なんでもきいてね」

「なにも分かりませんのでよろしくお願いします」

「貴方、前はどの店にいたの？」

「いや、お勤めするのははじめてです。東京はもちろん、生まれた田舎からもほとんど出たことはありません」

「そうなの、大変ね。だんだん慣れていくしかないわね」

「よろしく願います」

「ここでは、自分の名とは違うお店のなかだけで使われる名前がいるのよ。店の御主人とも相談したんだけど貴方のお店での名前は『若駒』っていうのはどうかしら。いいでしょ。これから、店では若駒。わかったわよね」

少し、恥ずかしいなと思って答えた。

「ハイ」

寺島さんが言った。

『若駒』か、なかなかいい名前だね」

店の規則などの説明を一通り受けたところで、寺島さんは席を立ち、帰っていった。松島さんから風呂場、便所、食堂、化粧室などを案内してもらった後、通りに面した大きな窓がいくつもある部屋に連れていかれた。そこにはたくさん綺麗な着物を着た女たちが窓の近くにたむろしている。窓からは通りを歩く人たちが見える。立ち止まって店の中の女たちを見回している男もいる。この部屋は張店と呼ばれ、男たちが花魁の品定めをするための部屋であることをあとから知った。

松島さんは皆に私を紹介した。

「今日、入った若駒さん、よろしくね。仲良くしてあげてね」

私は頭を下げた挨拶をした。

「大山タネ、いや若駒といます。よろしく願います」

女たちは私の身なりを上から下まで、興味深げにじろじろと見ていた。皆、無言である。

そこを出て、小さな部屋に連れていかれた。

「ここが貴方のお部屋、少し暗いけど、よく働いてくれたら、もっといい部屋に移れるから頑張ってね」

きちんと畳んだ布団、小さなちゃぶ台、鏡台、それに二組の座布団が目に入った。

「自分だけの部屋があるだけでも有り難いです」

松島さんはきちんと畳んである着物を押し入れから出して見ながら言った。

「これは、しかけていうの。お客の前に出る時はこの着物を着るのよ」

松島さんは裏も表も赤い派手な柄の着物を私に渡した。とても恥ずかしく着られそうにないと不安が頭をよぎった。

「ところで、貴方、この仕事初めてって言ったよね。周旋屋さんはどんなことを言っただけで来たか知らないけれど、男の人の相手をするの。男と女のことかなにかはわかるよね」

松島さんは表情ひとつ変えずに能面のような顔で言った。

「え、『お酒のお酌の相手をすればよい』って嘘ですか」

「もちろん、それもやってもらうには。でも、それだけではないのよ」

一瞬、頭のなかが真っ白になると同時に顔が火のように赤くなるのを感じた。知らない男の人と床を共にして金をもらい、それを店に収め、そのなかから、借りた金を少しずつ返していかなければならないこと、それとは別に月々の給金ももらえることを知った。しかしその額は寺島さんが言っていたようなものではなかった。借金を引かれると稼いだお金の三割ももらえないのだ。そのなかから、食事代や髪結い代などを払わなければいけない。客から料金とは別にもらったお金、ご祝儀というそうだが、それも半分は店に差し出すという仕組みだとの説明を受けた。

寺島さんに完全に騙されたことを知ったが、今となってはどうしようもない。大金を借りてしまったのだ。黙っていると松島さんは優しく言った。

「今日は疲れているから早くお休みなさい。明日は病院と警察に行くので朝食をさつき連れていった食堂でとってこの部屋で待っていてね。迎えに来るから。布団は男の人が畳みにくるからそのままでもいいからね」

男の人に布団を畳ませるのか、随分なことなと思うとともに自分の部屋に知らない男の人が踏み込んでくることに抵抗を感じた。店には料理や食事の後片付け、掃除や布団の上げ下ろしなどをする男の人がたくさんいること、その人たちが男衆と呼ばれることがあとで分かった。

布団を敷いて横になったが、これからのことを思うと不安と恐ろしさにさいなまれ、朝までまんじりともしなかった。

あまり食欲はなかったが、床から出て食堂に向かった。食堂では男の人たちが朝食の準備を終わったところだった。皆、起きるのが遅いのか誰も来ていな

かった。すると、ひとりの男の人が私を見つけて言った。

「見かけない人だね。新しい人かい」

「大山タネ、あ、若駒です。よろしくお願いします」

「どうやら慣れてないようだね。この仕事は初めてみたいだね」

「そうです」

「そりゃ、大変だ。まあ、ぼちぼち慣れることだね」

お膳に並んでいるのは御新香と薄い味噌汁、それにご飯だけである。寺島さんの言っていた料理とは似ても似つかないものだった。

寺島さんへの怒りがこみあげてきた。

近くの病院に行つて恥ずかしい思いをしながら検査を受けたあと、写真屋に寄り、写真を撮られ、娼妓登録のために警察署に連れていかれた。江戸時代には、遊女でも位の高い者だけが花魁と呼ばれていたが、今は皆、花魁と呼ばれるのだと後で客から聞いた。この時から花魁の仲間入りをした。

髪結いさんが来て髪を結ってくれた。田舎では見たこともない独特な結い方だ。松島さんが来て、しかけを着せてくれた。その姿を鏡に写してみても恥ずかしそうにしていると、松島さんが言った。

「あら、初々しい花魁さん。とてもよく、似合うわ」

「花魁」と呼ばれて誰のことかと思つた。これからは別世界に生きることになるのかと思うと涙が自然に出てきて、鏡に写つた自分の姿がかすんだ。

初めて店に出る花魁は初物とされ、高く売ろうと「初見世」と称して客に喧伝する。店の表には私の写真とともに『初見世 若駒』と書かれた看板が出た。

この初見世は一ヶ月も続いた。この間に相手をした客から特別料金を取るといふから大した商売魂だ。覚悟はしていたとは言え、初めて男の人を相手にした時には哀しかった。もう普通の女ではなくなつたと、その夜は床の中でずっと泣いていた。

数日経つて、松島さんに呼ばれた。

「貴方、男にもつと気にいらなければダメよ。お床に入る前にお茶を出したら、男にすり寄つて膝をくつつけるとか、腿をちよつとつねるとかするのよ。」

大抵の男はそれで悦ぶものよ」

花魁の経験者らしく、商売のコツを教え込んだ。

「でも、そんなことは……」

「貴方が相手をしたお客から言われたのよ。『今度来た花魁、あの初見世はなんだ。お高く止まってやがる、注意してくれよ。初見世つてことで余分に金を取るくせに、あれでは詐欺だ』つて」

「すみません」

『それくらいの方が口説き甲斐があるでしょ』とは言っておいたけど。これからは注意するのよ」

「男の人つて、どうしてあんなに威張るんですかね」

「相手は客だよ。『お客様は神様』つていうだろう。言われたらなんでも『ハイハイ』つて言っておけばいいんだよ。男にいい思いをさせてなんぼの世界だからね。決して逆らつてはいけないよ。なにを言われても我慢するんだよ」

「早く慣れるように頑張ります」

「でも客に本気で惚れたらだめだよ。いい花魁というのはいかに男に惚れさせるかだよ。いや、いかにもこちらから惚れたように見せかけて騙すかだよ。なぜ、花魁つていうか、知っている？」

「いや、知りません」

「キツネもタヌキも人を騙すだろう。でもどちらも、尾っぽがあるよね。花魁も男を騙すけれど尾っぽなんかないだろう。尾がなくても騙す、だから『オ(は)イラン』と言うのだとき」

「そうなんですか」

「そんなわけないだろう。どこかの落語家がそう言っていたのを聞いたのよ」

男に弄ばれて悔しい思いをして泣く日が続いた。しかし、いつまでも泣いてばかりはいられない。生きていくためには耐えなければならぬのだ。田舎にいた時の自分は死んで、若駒というまったく別の女になったのだ。奉公を終えたら、また生まれ変わって元の私、大山タネになる、それまでの辛抱だと思うことにした。もつとも、そこまで思い込めるようになるまでには随分辛い思いをした。一ヶ月の長かった初見世もようやく終わった。

松島さんから病院に検査に行くようにと言われた。一ヶ月に一度の辛い恥ずかしい検査が待っている。病気に罹っていることが分かれると店には出られない。病気がひどいと入院させられる。その間は給金が出ない。それで皆、病気になるのを怖がっている。

不思議なもので。いつのまにか、男の人と寝ることに慣れてきた。按摩でもやっているようなものだど割り切るようになった。それからはこの世界、花

魁たちや遊びにくる男たちをじっくり観察してやろうと思うようになった。

私と気が合い、よく面倒を見てくれる小菊さんという花魁が言った。

「若駒さんは女学校を出ているんだって」

「そう、田舎の学校だけ」

「それがどうして、こんなところに来るようになったの」

自分の働いているところを「こんなところ」と呼ぶ言葉にひっかかりを感じたが、羽振りがよかった父が株で失敗して大きな借金を作って亡くなったことなどを手短かに話した。

「貴方って、運がないのね。でも、そんな人はあとで、また運がついてくるよ。もう、くよくよしないことよ」

「ありがとう、私も最初は落ち込んでいたけれど、気持ちを切り替えて随分、気が楽になったわ」

「欧州の戦争の話がでたので思い出したけど、あの頃は戦争景気でお客さんも気前がよかったわ。ご祝儀で百円や五十円くらいを気前よくくれる男もいたわね。今では考えられないけど」

小菊さんは数年前を懐かしく思い出すように語った。

「ところで私のことは話したけれど、よかったら貴方のことを教えてくれない」

「生まれてきてから一度もいい思いをしたことがないの。辛いことばかり」

と小菊さんは次のように自分のことを話し出した。

小菊さんには年の離れた兄がふたりいた。小菊さんが生まれて、すぐ相次いで両親が亡くなった。兄たちは既に大きくなっていたのでふたりとも叔母の知っている呉服店にでっち奉公に出され、残された小菊さんは叔母の家に引き取られて育てられ、大きくなると女中奉公に出されて働いていた。しかし、騙されて借金を作ってしまった叔母はその返済のためにこっそりと小菊さんを芸妓としてこの店に売ったのだった。一方、兄たちは奉公先の店で毎日いじめられたので店から逃げ出して、今はどこにいるのかも分からないらしい。

「苦しい思いをしているのは、自分だけではない、もつと辛い人もいるのだ。自分には帰るところがあるし、母も妹もいる、それだけでも幸せだ」と思った。

初めて相手をする客を初回と呼ぶ。馴染みの客が友達を連れてくることがある。馴染みの客は決まった花魁を相手にするが、友達にはそんな相手がいない、つまり初回だ。自分の馴染み客であれば、自分によくしてくれる花魁を番頭に

頼んで友達を初回につけてもらうことがある。それで馴染み客の多い花魁は、花魁同士の間でも人気がある。

売れっ子の花魁で馴染み客に頼み込んで、店に友達を連れてきてもらい、余り売れない花魁に初回として斡旋して、いくらか貰っているような人もいると小菊さんは言っていた。商売上手な人もいるようだ。

若葉さんが話しかけてきた。

「明日は日曜日だね。いやだ、いやだ」

「どうしていやなの」

「日曜は兵隊さんの休みの日よ」

「それが関係あるの」

「貴方、兵隊さんの客をとったことないの」

「いや、まだ……」

「そう、いいわね。兵隊さんは日曜にしか兵舎の外に出れないの。それで朝から来て夕方ぎりぎりまでいる。そのくせに金は少ししか出さないの。規則があるからと言って泊まってもいかないし」

「そんなの、お金をもっと取ればいいじゃない」

「それが、兵隊さん割引つていうのがあるらしいの。『店もお国のために協力します』とかいって。馬鹿々々しいといたらありやしない」

「兵隊さんも毎日、訓練で大変だから息抜きしたいんでしょう」

「早く、戦争でも始めて、皆、外国にでも行ってしまえばいいのだけれど」

「戦争、物騒な話ね」

「兵隊さんだというお客さんから、聞いたのだけれどシベリアってとても寒いところに行くことになったって。日本は戦争しているのかしら」

「戦争なんかしてないんじゃない」

客から聞いた話を思い出した。シベリアに日本から兵隊を派遣しているが、派遣される兵隊たちは、出兵前には必ずと言っていいほど吉原に行って遊ぶ。それを軍も大目に見るらしい。

朝、食事をしていたら店がなにやら騒がしい。男衆たちが主人の部屋に呼ばれたようである。何があったのかと小菊さんに訊いた。

「なんでも、千歳さんが馴染みの男と昨夜、逃げたらしい。それで大騒ぎになっているの」

「だって、門には厳重な取締りがあるし、夜、十二時にはどの門も閉まってし

まうんじやなかったの」

「どうも、高い塀に梯子をかけて逃げたらしいの」

「でも、見回りだっているし」

「見回りだつて、金を渡せば、見逃すわよ。すぐに警察に届けたらしいから捕まるんじやないの」

「そうね。私たちの身なりは素人さんと違うから目立つし」

その日のうちに千歳さんは男の人の家に隠れているところで見付かった。店に連れ戻されるようだ。小菊さんの話だと、これから男衆によるひどい折檻が待っているらしい。逃げた花魁を連れ戻し折檻することを楽しみにしている男衆もいるそうだ。おお怖いと思った。見回りは鋭く追求されたうえに、クビになったと後日、知った。

ある日、私の馴染みの学生さんの客が、友達と一緒に来た。友達は初回だ。

千鳥さんの馴染みの客の友達を回してもらったので、今度は私が千鳥さんに回してあげた。お互いさまである。

千鳥さんが男の帰った後に言った。

「ありがとう、回してもらって」

「お互いさまよ」

「あの客、やたらに『俺はドクトルだ』って威張るの。ドクトルってなんなの。毒を取ってくれる人なの」

『毒を取る』か、確かに医者には体の毒を取ってくれる。うまいことを言うなあ」と感心しながら聞いていた。

「お医者さんのことよ。まだ学生さんのようだったから医学校にでも通っているんじやない」

「そう。お医者さんの卵なの。それなら診てもらえば、よかった」

「どこが悪いの？」

「お客さんにねだつて台の物を取ってもらったのだけれど、そのなかにあった刺身がいけなかったのか、当たったみたい」

「そう用心しないと。でも、威張るような男ならしれているよ。だぶん、適当に病名を言うだけ。薬でも飲んでいたほうがまだよ」

私は毎月の検査で通う病院にいるやたらに威張る若い医者のことを思い出しながら言った。お客に外の店から料理、台の物をとってもらって一緒に食べることもあるが気を付けなければ、と思った。

さんざん、呑んできたのだろう酔っ払ったお客がひとりで来た。馴染みはないようである。私は自分に回って来ないことを祈った。しかし、番頭さんの声。

「お客様！ お新規さん、若駒さん、お相手」

いやだ、いやだと思いつながら、部屋に通した。酒臭い匂いをプンプンさせている。

「花魁、酒、持って来い」

「ハイハイ、分かりました、でも、もう相当召し上がっているようですから、少しだけにして下さいね」

「バカ野郎、女のくせに、男に説教する気か」

私は馬鹿々々しいと思つて黙っていた。すると、

「返事をしろ。早く男に抱かれないのだろう。だから、俺に酒を呑むなっていうんだろう。そうだよ。花魁なんて男なしでは生きていけない、それくらい俺は知っているんだ。男に遊んでもらつて金が儲かる、こんないい商売はないよ。俺も女に生まれてきて花魁になれたかったよ」

前の私なら、これはいくらなんでもひどすぎると思つて悔しい思いをしたらどうが、今はそんな感情も起きず、反対にひとり酒をあおり酔いつぶれて花魁相手に悪態をつく男の人を哀れに思つた。

「……」

「なんだ、なんだ。なぜ、黙っている。凶星だろう。お前が羨ましいよ。俺なんか、朝から晩までこき使われて、ちよつと失敗したからつて、怒鳴られ、皆の前で恥をかかされ……ちくしょう！」

怒つていたかと思うと、今度は手を目に当てて泣き出した。

「ちよつと、用を足しに行つてきます」

見ているのが気の毒になつたので口実を作つて部屋を出て行った。しばらくして戻つてみると、いびきをかいて寝ている。女だけでなく男の人も辛い思いをするものだと思い、そつと布団をかけてやった。

春駒さんに話があると言われ、彼女の部屋に行った。

「なんなの、話つて」

「実は、お願いがあるの。この前、貴方のお馴染みさんがいっしょに連れてきた人、初回を私に回してくれたでしょ」

「ああ、千葉さんといっしょに来た人ね。確かに貴方に回したわ。それがどうかしたの」

「その人のことが気になって仕方がないの。上品な顔をしていてきつぷがいの」

「つまり、惚れたってことね。花魁はお客に惚れたらいけないって言われているでしょ」

「花魁だって女よ、好きな男もできるわ。それで千葉さんに頼んで是非、連れてきて欲しいの、その人を。支払いは私が立て替えるからって言ってね」

「よしたほうがいいよ。さんざん弄ばれて終わりだよ」

「お願いだから」

「しようがないね。分かりましたよ。今度、千葉さんが来たときに訊いて見ることにするね」

「ありがとう」

数日後、千葉さんが一人できたので、私は春駒さんの話を伝えた。

「羨ましい話だな。それは土井のことだろう。俺の勤めている銀行のお得意さんの息子だ。アイツの家は資産家だ。その花魁もいいところに目をつけたな。」

「あら、貴方だって私がいるじゃありませんか」

こんな言葉が自然に口をついて出て来る自分をもうひとりの自分が見下して見ているような気がした。

それから数日して、千葉さんから店に電話があり電話口にでた。

「だめだった。『俺は馴染みを作らない主義だ。吉原はいろいろな女が味わえるから行くのだ。もう大黒にはいかないよ』って言うんだ」

少し、むっとして「随分なことを言う、私たちはおもちやかと」と口から出かけたが我慢して止めておいた。

「分かったわ。残念だけれど仕方ないよね。ありがとう。伝えておくわ」

と言って電話を切った。春駒さんにそのまま伝えるのはあまりにも酷なので口実を考えて言い訳をした。

『馴染みの女を作ったことが親にばれたら怒られる』って言うの。そんな意気地のない男なんか諦めなさいよ」

これを聞いた春駒さんは随分しよげていた。片思いもあっけなく終わった。春駒さんも二、三日はくよくよしていた。しかし、すぐに立ち直ったのでほっとした。

小菊さんが馴染み客から頼まれたと言って初回の客を回してくれた。見るからに真面目そうな人だ。

「私の名前は吉田幸太郎と言います。私は芸妓の世界に深く興味をもっています。私の友人に小菊さんの馴染み客がいます。その人が小菊さんと話をしている『女学校を出た花魁がいる』と聞いたと言うので高い教育を受けた人なら、いろいろ芸妓の世界のことを詳しく聞けると思い、小菊さんから貴方を紹介してもらいました」

「女学校と言っても田舎の学校ですから」

「いや、少しでもこの世界についてお聞かせ願えませんか」

「興味本位で訊かれても困ります。よく小説のネタにしたいから、男とどういる会話をするのかとか閨事の様子とかについて聴きたいとかおっしゃる人がいますが、私たちはおもちやでありませんので……」

「いえ、いえ、そんなつもりは全くありません。実は私はイギリスの大学で社会学という世の中のことを研究する学問を学んできました。帰国して昨年から大学に勤めています」

と言つて、名刺を差し出した。そこには「早稲田大学 講師」の肩書があった。吉田さんはさらに続けた。

「イギリスでは女性が自分の権利を主張しています。社会で働く女の人も堂々としていきます。一部の人だけです。選挙権もあります。日本に帰ってみて、どうして日本の女の人の地位が低いのか、『男尊女卑』なのか、ずっと考えてきました。芸妓の世界はその象徴です。僕はそこに光を当てたいと思っています」

熱心に語る誠実そうな姿に好感がもてると感じて理不尽な思いをしたこの世界に入ったの頃のことを思い出した。

「分かりました。貴方の熱意に打たれました。私が常日頃、思っていることをお話しましょう」

女の側から見た郭の様子を語り、吉田さんはそれを克明にメモに取った。その後小菊さんは私を何回か尋ねてきた。

ある日のこと、突然訊いてきた。

「随分、悲惨な状態だということが分かりましたが、どこに一番、大きな問題があると思いますか」

「問題は社会の貧困です。ここにいる人たちのほとんどは親や兄弟の借金を返すために奴隷として売られてきているのです。なかには放蕩して借金を作ったという場合もあるでしょう。しかし、大半の人は収入が少なく生きていけないのでやむを得ずお金を借りて、それがいつのまにか膨らんでいくのです。その借金を女の私たちが体を売って贖っているのです。自分からこの仕事をやりたい、と思つてこの世界に飛び込んだ人もいるかもしれませんが。ただ、私の知り限り、そのような人は知りません」

吉田さんは嘆息しながら言った。

「未だ、日本には奴隷制度があるということですか」

「もちろん、アメリカにいたという黒人の奴隷とは違って借金を返せば自由の身にはなれますが、その頃には体はボロボロです」

「このような制度そのものをなくすしかないということですかね」

「いや、男の人も遊びたいでしょうから郭をなくせとはいいません。このような商売の好きな女の人もいると思いますから、そんな人たちを雇つて店を続ければいいと思います」

「遣してもらえぬなら、男にとっては有り難い話ですね」

「男と女がいる限り、いくら綺麗ごとを言つてもこのような商売はなくならないと思いますよ」

「ところで、これまで貴方から聞いた話をまとめて本にして出版しようと思うのです。どうでしょうか」

「いいですよ。でも、そんな本を買う人なんかいますかね」

自分の話などたわいもないことだと思つていた。

それから、吉田さんは急に来なくなつたから、どうしたのかと思つて、半年ほどしてぶらりとやつて来た。私の話したことをもとにした本を出したところ、売れ行きがともよいとのことである。いままで郭の話は落語などではよく取り上げられたが、女の側から見た話などなかったからだろう。もちろん、店の名前や実在する花魁の名前などは仮名にしたと言う。

吉田さんは思いもしないことを言い出した。

「貴方の店への借金はいくら残っていますか？」

「なぜ、そんなことをきくのですか」

「本は貴方と私の共著というにしました。断りもなく申し訳ありません。もちろん、貴方の名前は仮名を使っています。本の売れ行きがいいので印税が

かなり入りそうです。それで貴方の借金を返せば、貴方も自由の身になれるのではないでしょうか」

「ありがとうございます。まだ、八百円ほど残っていると思います」

「よろしいでしょう。印税だけで足りなかったら、これまでのお礼に私が出します」

金是用意され、私は遂に郭から開放されることになった。郭を出て、母と妹の待つ田舎に帰った。それからひと月ほどしてからのことであった。

関東大震災で吉原では大火災が発生して、多くの花魁たちが焼け死んだという悲惨なことがあったことを新聞で知った。目を閉じると郭で親しくした花魁たちのひとり、ひとりの顔が目に浮かんで涙が止まらなかった。

(了) (13775字)

参考資料 吉原花魁日記 (森光子著・朝日文庫)

* (著者は女優の森光子とは別人です)